

『ありがとう』
広瀬厚氏
5807 文字

あらすじ

とても天気の良い休日の午前、私は散歩に出かけた。散歩の途中、車のワックスがけをしている高橋さんに挨拶をした。日頃使用している物に感謝をして綺麗にする事は良いものだと言った高橋さんは言う。そう言えば私が子供の頃、父親も同じような事を言っていたなと思い出す。

ありがとう

青の青さが濃くもなく薄くもなく程良く澄んだ蒼穹遥かまで広がる、なんとも爽快な休日である。

普段より少々遅めの朝食を済ませた私は、居間の窓を開け、寝巻のまま座し、外をぼんやり眺めている。すると同居する雌三毛猫のチョビがテケテケテケとやって来て、あぐらする私の膝の上にチョンと乗り香箱を作った。台所から妻が食器を洗う音が聞こえてくる。子供達は二階に上がった。

庭先に、飛ぶのがまだ拙そうな三羽の子雀が空から降りたち、庭木の蔭に入りチュンチュン戯れている。それを慈しむように私が目を細めて見ていると、チョビがニャニャーと鳴いて香箱を崩し、膝からピョンと降りた。と思った途端、またニャーと鳴きながら庭先に駆け降りた。

「コラ、チョビ！」と私は言って、立ち上がった。

彼女はこれまで何べんも、鳥や鼠、小動物を口にくわえ、誇らしげに家へと持ち帰った狩の名手である。子雀達が危ない。チョビは子雀達と距離を置き静止した。狙いを定めた彼女の尻がプリプリと動いた。今にも襲いかかりそうだ。思わず私は裸足で庭に降りた。刹那チョビは子雀達に向かい跳躍した。駄目だ！と思ったが、間一髪のところ三羽は一斉に空に舞った。

「残念だったな、チョビ」

私が言うと彼女はふり向き、悔しそうな目をしてニャーと鳴き、そのまま何処かへ遊びに出かけた。清々しい良い天気だ。家にこもるには勿体ない。私も散歩に出かける事にしよう。

「おーい知子」と私は、開けた居間の窓のところに腰かけ、土がついた足の裏を手で払いながら、妻を呼んだ。

「何？」と、台所のほうから聞こえる。

「ちょっと濡れたタオルか何か持って来てくれ」

「どうしたの？何か汚しでもしたの」

すぐと妻は私のところに来て尋ねた。手には何も持っていない。私は先ほどの経緯を簡単に話し、それで汚れた足を拭くのだと答えた。すると妻は洗面所へ行き濡らし絞ったタオルを持ってきてくれた。私は足を拭き居間に上がった。

寝巻から普段着に着替え、私は家の玄関を出た。お前も一緒に行かないかと一応妻を散歩に誘ってみたが、まだ家事があるので止しておくのと体良く断られた。

郊外に建つ私の家の周辺は、どちらかと言えば長閑な場所である。大通りから離れているので車の通りも比較的少ない。田畑がある。寺がある。神社がある。緑のしげる公園がある。野良猫がうろつく。我が家のチョビもうろつく。

家を出て少し行くと余所の家の敷地から、チョビがヒョイと顔を出し、道路に出てきた。何かイタズラしていないか少々不安になる。目と目が合ったが、彼女は私の事なぞ知らぬ存ぜぬってな感じで、クルリとシッポを向けて、チリンチリン鈴を鳴らして何処かへ走り去った。家の外で会うといつもこんな感じによそよそしい。ちと寂しく思う。空を仰ぎ、両手を上からだを伸ばし、深呼吸する。鷺が西の方角へ飛んでいった。

高橋さんがカーポートの下、車のワックスがけをしている。

「おはようございます。朝から精が出ますね」

「やあ中村さん。手をかけて綺麗になると気持ちが良いですから、これでけっこう楽しいもんです」

「そうですか、僕なんか無精なもんですから、よっぽど汚れたら洗車機通すぐらいで、自分でワックスかけた事なんかこぞずっとありませんよ」

「ははは、最近はそのような人のほうが多いんじゃないかな。でも、あれですよ。普段使っている物に感謝して綺麗にしてやると愛着もわきますし、なんだろうなあ…ま、とにかく良いもんですから」

「なるほど、僕も見習わなくちゃ。続き頑張ってください。じゃあ、それでは」

私が軽く会釈をすると高橋さんは会釈を返し、再び額に汗してせっせと手を動かした。散歩を再開した私の胸に、ふと子供の頃の記憶が蘇った。

その頃私の父親は、天気の良い休日になると、だいたい決まって愛車を洗車し毎回のようワックスをかけていた。そう言えば・・・愛車と言う言葉も近頃あまり耳にしなくなった。そして私の父親だけでなく、青空の下、愛車を洗車しワックスがけする風景を良く目にしたものだ。父親の愛車は高級なものでなく所謂大衆車、それもグレードの低いものであった。それでもそれに拘らずとても大切にしていた。

ある日私は愛車にワックスをかける父親の姿をそばでしゃがんで見ていた。すると父親は、脚立に乗ってルーフの上で手を動かしたままに私を見て言った。

「おい太一お前も手伝え」

私はのそりと立ち上がり、

「いいけど何をすればいいの？」と聞いた。

「そのタオルでワックスかけたところを拭いていってくれ」と父親は依然手を止めず、顎先でボンネットの上に置かれたタオルを指して答えた。

私がタオルを手にワックスのかかった箇所をいい加減に拭き始めると、それを見た父親は、おい太一もっと気持ち込めて拭かなあかんぞと言って、ワックスをかける手を止めた。そして、ちょっとタオル貸してみろ、と私に手を差し出した。私がタオルを手渡すと父親は愛おしいものを撫でるように、

「ありがとう。ありがとう」と口にしながら、ワックスのかかった車のボディーを拭くのだった。

普段冗談とか言わない、どちらかと言えば厳格な父親である。その父親が、ありがとうありがとう、と言ってワックスを拭き取る姿に私は非常に滑稽を覚え、思わずぷつと吹き出した。

「何がおかしいんだ」と、父親が真面目な顔をして問う。

「だって、ありがとうありがとうって…」と、私は曖昧な返事をした。

「たわけ！ そう言った感謝の心が大切なんだ。お前だってこの車乗るだろう」

そう言って、父親は今ワックスを拭き取った箇所に、はあと息を吹きかけ、もう一度丁寧に拭いた。それから艶の出たその面を、正面から斜めから色んな角度から眺め、

「うん」と、満足そうに頷いた。

「ほれ」と、タオルを私の手に戻した。

「うん」と、タオルを手に私も頷いた。

「ありがとう。ありがとう」と、私も拭いてみた。

「はあ」と、私も息を吹きかけてみた。

もう一度丁寧に拭く。そして色んな角度から艶を眺めみる。私はワックスのどこか甘いような匂いに包まれながら、子供心に愉快を覚えた。

パールホワイトの色をした最新型ハイブリッドカーが、ぶらぶら歩く私を、後ろから静かに追い越していった。太陽の光を受け雲母片が煌めく。

長閑な朝を逍遥しながら私の回想は、免許を取って初めて自分の車を所有した時分へと移った。

その当時白い車が多かった。私の手にした車もそれに漏れず、中古で買った白いセダンだった。その白はスリーコートやらのパールホワイトでなく、クリアーも塗られていないソリッドのホワイトだ。何ちゃらホワイトとか言って結構人気があった。やたら水垢が付いた。

当時は私も初めての車という事もあって、わりと頻繁に洗車やらワックスがけやらしていた。頑固な水垢落としに苦戦した。雨が降って少しほかっとおくと、白いボディーが全体にくすんで雨垂れの跡が醜く無数に線を引く。水垢落としのワックスを一生懸命ボディーにかける。そして一生懸命拭き取る。なかなか綺麗に水垢は落ちず、ところどころむらむらとなる。草臥れる。嫌んなる。

ガソリンメーターの針がエンプティーに近づきスタンドへ行く。

「お客さん、結構水垢がついてますね。洗車機で水垢落としが簡単綺麗に出来ますよ。良かったらどうですか？」

「じゃあやって貰おうかな」

汚れた私の車を見て、ガソリンスタンドの店員が洗車機による水垢落としを勧めるので試しにお願いする。

「お待たせしました。綺麗に水垢落ちましたよ」

確かに水垢は落ちたが、何とも艶のないガサついた肌となり残念を覚える。

「どうもありがとう」と、一応礼を言って私は車に乗り込んだ。

「お帰りはどちらの方へ？」

「東へ出る」

「ではあちらからどうぞ」

オーライオーライと店員が、店から車道に出るのを誘導する。出口にてストップ！と、両手を前に突き出し止める。右左右と顔を向け車の往來を確認する。突き出していた右手を東に向け、はいどうぞーっ！と発車促す。

「ありがとうございました！」

ふかぶかと頭を下げる店員を見て私は、勝手にさせてくれ、はっきり言って煩わしい、とよく思ったものだ。

そのうち汚れていようが気にならなくなり、ほとんど車の手入れをしなくなった。だいたいこんなに車を大切に扱うのは日本人ぐらいだ、なんて言った言葉もちよくちよく耳にした。いつ頃からか業者による一年間ワックス不要とか何とか唄ったポリマーコーティングなどが出始め、金のある奴らは挙って施工した。私は金のない奴だったので頼んだ事はない。否、あってもしなかったと思う。良くは知らないが今はガラス系のコーティングが主流だと聞く。これは私見であるが、何やかんや言って自分で小まめにワックスをかけ手入れしている人の車が綺麗だと思う。心の入れ方がきっと違う。

思いをめぐらし歩く私の目に真宗の寺の大屋根が映った。何とも有り難き勾配である。反りかたが控えめで上品である。美しい。中国の寺ではああはいかない、反り返っている。

私が寺の門をめぐり本堂を眺めていると和尚が出て来た。

「こんにちは、ほんと良いお天気で」と声をかけてきた。

「はい、ありがたいです」

「ほほう天気感謝されるか」

「この本堂の大屋根もその釣鐘堂の梵鐘も全くありがたいものです。そんな気分にしてくれる天気ですから」

「世間虚仮と言ってここがいくら虚しき仮の世であったとしても、そこで感謝出来る心は大変尊いものだと思います。さて私は行きますが、どうぞごゆるりと」と言って、和尚は嫺やかに歩き去った。

私は、まるで小説の中にもいるような不思議な気分となった。今さっき話した言葉も自分の口から出たのではないよう感ぜられる。誰もつかない鐘の音が聞こえる。無風のなかで梢が揺れる。ふと思った、感謝のなかに質朴なる日本の綺麗がある。

私が散歩から家に帰ると時刻は11時を少し回っていた。確か9時前に玄関を出たので、それから2時間以上たっている。時間を全く気にせずいた私は、そんなに散歩をしていたのかしらと我ながら驚いた。掛け時計を見て立つ私の足もとに、ニャーと鳴いて、チョコビがからだをすり寄せ甘えて来た。私より彼女のほうが先に家へ帰っていたようである。私は、おうチョコビ先に帰っていたか、と言って彼女を足もとから胸もとへと抱き寄せた。

午後から久しぶりに洗車とワックスがけでもしようと思った。久しぶりも久しぶり……最後に自分で車にワックスをかけたのはいつだったのか全然覚えていない。

ところで肝心のワックスを車に積んでいない。かけるワックスがない。ならばちよつくらホームセンターへでも行って買ってこようか？ ん、いや待てよ、物置の奥で見たような覚えがあるようなないよ

うな。と、私は物置部屋へ行き車のワックスを探した。あっ！ と思って見たら、それはフローリング用のワックスだった。どうやら勘違いしていたようだ。

「あなたー」と妻の呼ぶ声が聞こえる。

「なんだー？」と私は物置から出て尋ねた。

「お昼だけどインスタントラーメンで良いかな？」

「もう昼か。うん、ラーメンでも何でもかまわないよ」

家族四人前のラーメンは間もなく出来上がった。私が食卓につくと二人の子供も妻に呼ばれ二階から下りて来た。ラーメンのつがれた器を前に四人食卓を囲んだ。

「お前たち昼から何か用事はあるのか？」食事をしながら私は子供達に聞いた。

「友達と約束があるから、これ食べてちょっとしたら出かけるつもり」高校一年の花純が答える。

「俺はとくに何もないけど」中二の翔太が姉に続き答える。

「そうか、昼から居間の床にワックスかけようと思うんだけど、翔太お前も手伝え」

「えーっ、嫌だよ。めんどくさい」

「そう言わずにたまにはお父さんのいう事聞いてくれよ」

「どうしようかな、まっ、しょうがないな。貸しを作るつもりで手伝ってやるよ」

「ありがとう」

「あなた急にどうしたの？ 大掃除の時にもそんな事しないのに。床にワックスなんていつ最後にかけたかしら。ワックスは確か物置に置いてあるけど」と妻が言う。

「うん、さっき車のワックスなかったかな？ って物置行ったら、代わりにフローリングのワックス見つけて思い立った」

「あらそう、頑張ってるね。午前中に掃除機はかけてあるから、とりあえず綺麗に水拭きでもしてからね」

即席ラーメンを腹に納め、一休さんではないが、一休み一休みとソファーに寝そべり、のんびんだらり暫し時間を無駄に費やした後、私は立ち上がった。そばで見もしていないのにテレビをつけ、あぐらを組みマンガを読んでニヤニヤしている息子に声をかける。

「おい翔太、そろそろ始めるとするか」

「うん…」と、かたがたそうに息子が返す。

「おい、もっとシャキッとしなよ。シャキッとさ」私は言った。

私が水に濡らし固く絞った雑巾で床を拭く。そのあとを乾拭きするよう息子に命じた。

私は丁寧に床を拭いていった。息子は面倒臭さそうに乾いた雑巾をタラタラ手で動かす。

「もっと気持ちいいで拭けよ！」見兼ねた私は言った。

「なんだって良いじゃんか、拭いてるんだから」息子が返した。

「いや違うぞ！ 拭けば良いってもんじゃない。お前毎日この床を足の裏で踏んでるだろ。この床があるからこそ足が土に汚れず綺麗におれるんだ。感謝しなきゃ駄目だ！ ありがとうありがとうって気持ちで拭くんだ」

「なんだよ急に説教始めて、おやじこそ手伝う俺に感謝しろよ」

「感謝してるさ。だからお前も感謝しろよ」

「馬鹿らしい！ もうやめた！」翔太が吐き捨てた。

「ありがとう。ありがとう」と、歌うように節をつけ言いながら、へそを曲げた息子に構わず私は水拭きをまた始めた。

「馬鹿じゃないの」と、息子は私を鼻で笑った。

が、構わず私は真面目に続けた。一心不乱に床を磨く私に感化されたのか、やめたと言った翔太が乾拭きを始めた。

「ありがとう」と私は息子に頭を下げた。

「… うん」と息子は、ちょっと照れ臭さそうに返した。

居間の床はさっぱりとして綺麗になった。それから私と息子は、まるで念仏でも唱えるように、

「ありがとうありがとう」と、半分冗談で口に繰り返しながら、ワックスをかけた。結果床は綺麗に艶やかになった。それ以上に私の心も綺麗になった気がする。息子は自分が手をかけて綺麗になった床を眺め、満足そうに「うん」と頷いた。